

## カーター元大統領死去（590号）

2025年 2月 石館

第39代米大統領ジミー・カーター氏が昨年12月29日、100歳で死去した。ピーナツ農家出身の庶民派で、敬虔なキリスト教徒。カーター氏は無名ながらも清新、素朴なイメージで国民の心をつかみ、大統領としてベトナム戦争とウォーターゲート事件で傷ついた米国の再生に取り組んだ。

在任中の最大のレガシー（遺産）は1978年9月の中東和平合意であろう。エジプトのサダト大統領とイスラエルのベギン首相を米ワシントン近郊のキャンプデービッド山荘に招き、両首脳の小屋を何度も行き来し2週間近くかけて歴史的な和解を実現した。



大統領公式肖像（1978年）

ニクソン元大統領が着手した中国との関係正常化交渉を引き継ぎ、79年1月に国交を樹立したのも功績の一つだ。

ただ在任中の評価を米国人に尋ねると総じて辛口の答えが返ってくる。特に政権末期はイランの米大使館人質事件への対応に追われ、救出作戦に失敗して信用を失った。米国弱体化の象徴とみなされ、再選を阻まれる屈辱を味わう。

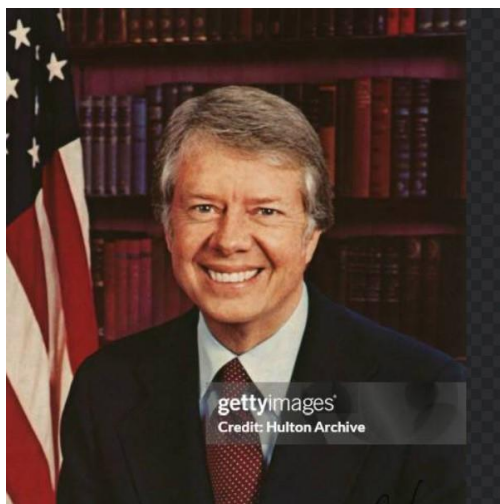
小生の2回目のドイツ駐在は1975年から1981年までであるが、1978年家内の父親がドイツに孫に会いに来た。その時デュッセルドルフからベルリンに遊びに行き、偶然カーター大統領がドイツを訪問した時であり、カーターのパレードを目の前で見た。その時のカーターの笑顔は忘れられない。カーターはその明るい笑顔がトレードマークであった。

またこのパレードの時、小生の目の前約20メートル先を歩いて手を振っていたが、大統領の警護が非常に甘かった記憶がある。後で聞いた話だがカーター

はベルリン市民と直接接したいと厳しい警護をやらないように指示をしたとのこと。いかにもカーターらしい話である。

ジミー・カーターはジョージア州ブレインズにて食料品店主兼農家のジェームス・カーターシニアと看護婦リリアン・カーターの長男として誕生した。アーチエリーの近くで成長し、ジョージア工科大学で理学士の学士号を取得した。

1946年海軍兵学校を卒業し、同年21歳の時、18歳のロザリン・スミスと結婚した。



カーターの明るい笑顔

カーターは大西洋および太平洋の艦隊で潜水艦に勤務。1961年海軍を大尉で退役し、当初は低所得者向け公営住宅に暮らすが、妻と共に公共図書館で自学してピーナッツ栽培に取り組み、成功を収める。

1961年ジョージア州上院議員に当選、その後1971年に州知事選に勝利19

75年まで州知事を務めた。州知事としては人種差別撤廃・行政改革・校区の貧富の差による教育格差の是正に取り組んだ。

1976年アメリカ合衆国大統領選挙に民主党候補として出馬した。当初は、“ジミーって誰の事 (Jimmy, Who?) ”という言葉が流行するほど知名度が低かったが、ウォーターゲート事件により疲弊した政治の刷新を求めるアメリカ国民にクリーンなイメージと満面の笑みをアピールした。

選挙戦では世論調査会社を活用し、各州の抱える問題の情報を収集し、それに対応するメディア戦略を取った。その結果1976年5月に実施された世論調査の段階で、現職のフォード大統領を上回る支持を得た。本選挙でも僅差であったが勝利した。大統領就任式の後、議事堂からホワイトハウスまで歩いて就任パレードを行った初の大統領であり、このパレードが非常に好評であったため、その後多くの大統領がこれに倣っている。

第38代大統領のフォードは、ニクソン大統領がウォーターゲート事件で辞任した1974年に副大統領から昇格した。フォードが共和党下院議員で院内総務を務めていた時ニクソン政権のアグニュー副大統領が汚職事件で辞任し、副大統領に任命された。彼は副大統領としても、大統領としても、選挙で選ばれなかったのは彼だけである。

カーターにとって大統領選の相手だったフォードは、選挙で選ばれておらず、やはり、国民の信頼は今一つでこのような相手と戦ったことは無名だったカーターにとってラッキーだったと言えるかもしれない。



テヘランのアメリカ大使館の塀を乗り越える学

カーターは選挙戦の時もそうだったが、世論調査のデータを妄信する傾向にあり、調査データの集計ミスの結果、しばしば政権の判断ミスに繋がったことがある。内外政策の度重なる失敗、特にイランアメリカ大使館人質事件への対応の拙さによって国民の支持を失った。

1980年の大統領選では共和党候補のロナルド・レーガンに大差で敗北し、1期4年で政権の座を去った。

カーターがホワイトハウスを去ったその日に人質が解放されたことから、海外のマスコミを中心に“選挙後まで人質を拘束させ続けるためにレーガン陣営が秘密の取引を結んだ”という報道が見られた。

就任後施行したいくつかの経済政策の失敗と、1979年のイラン革命と前後した石油危機などから、在任中は高インフレと不況が国内を覆うことになった。また外交において降りかかった様々な問題に傾注した結果、これらの国内問題を解決することは出来なかった。

カーター在任中の業績に対する評価は低かったが、むしろ、この人が輝きを増したのは大統領を退任した後だ。56歳で大統領を退いて帰郷し、40年余りを元大

統領として生きた。民主党の支持者は親しみと無念さを込めて“最強の元大統領”と呼ぶ。



カーター元米大統領夫人のロザリンさん死去、96歳 18歳で結婚 ...

ロザリン夫人は南部人の粘り強さと心の強さで、夫の最も親しいアドバイザーかつ腹心だったことは公然の事実であり、彼女は多くの閣僚会議に参加した。実際に彼女はホワイトハウスの自らのオフィスに書類カバンを持ち込んだ最初のファーストレディであった。

退任後は人権や平和の伝道師として活躍し、北朝鮮やキューバにも足を運んで対話を試みた。“平和的解決と民主主義・人権促進のための不屈の努力”が評価され、02年、米大統領経験者として3人目のノーベル平和賞を受賞する。

“他人の不幸に無関心で悲しみを感しないのなら、人間とは言えない”人道主義や理想主義が最後まで背中を押した。脳にがんの転移が見つかったのが15年8月、病と闘いながら、人生を楽しむ姿勢を貫いた。最後に公の場にすがたをみせたのは2023年11月、故郷南部ジョージア州で77年連れ添った妻ロザリンさんの死を惜しむ追悼式に車椅子で現れた時だった。

カーターは任期中は大統領として評価は高くはなかったが、トランプに比べ人間としての高潔さは、あまりにも違うことは、否定できないであろう。